筑前國續風土記 卷之二十目錄

早良郡上

紅葉八幡宮西光寺

紅葉松原

鳥飼村 草香江 千賀浦

庄村天神社 岩木判官正氏墓 室見川

御手水川 鷺尾權垣井愛宕權現

岩窟辯才天 姪濱 探題墓

小戸 興德寺 能古島

也良崎 生松原 生松

大閣道 山門村 七隈村

小田邊村 野方村 野芥塚穴

飯盛社 四箇村 金武村

重留村 入部村

筑前國續風土記 卷之二十

貝原篤信選定

貝原好古編録

竹田定直校正

早良郡 上

此郡は、福岡城下の西に在て近し。福岡の城も町も、西の方三分一は、早良郡に屬せり。此郡、北に海有て、三方に高山有。廣平の地に、村里多く、水田多し。中に早良川流る。故に、山林河海をなはりて、薪材乏しからず。魚鹽多し。河水多けれども、滯なくして、水旱すかんの患稀なり。され共、平田は肥饒ひせうならずして、種植しゆしよく豊ならず。凡此國の内、那珂、席田、表粕屋、御笠、夜須、下座、上座の七郡は、南北に長く地つらなりて、其間に山へたゝらず。嘉摩、穗波、鞍手、遠賀、四郡も又しかり。宗像、裏粕屋は、東西に並びつゞけり。怡土、志摩兩郡も南北に地つらな

れり。只早良一郡のみ、東西南三方には高山有て、他郡に隔たり。北は海なり。是他郡に同じからず。

和名抄に載る所、此郡の郷の名六有。

毘伊今樋井郷と云。平飯盛の邊を今は戸栗の郷と云ふ。戸の字へとよむ。郡飯盛、吉竹、羽根戸、金武、野方、田村、重留の郷と云。

額田有田、小田邊等をすべて平郡の郷と云。早良田能解今能解村有。

今稱する所の村の名

脇山村 城原村脇山村の内 野田村 同上

池田村 同上 東入部村東入部村の内 長峯村

清末村 同上 三郎丸村 同上 西入部村

和田村西入部村の内 四箇村 都地河原村四ヶ村の内

金武村 西山村金武村の内 乙石村 同上

都地村 同上 重留村 田村

立石村田村の内 次郎丸村 高石村次郎丸村に屬す。

立屋敷村次郎丸村の内 橋本村 戸切村橋本村に屬す。

野芥村 千熊村野芥村に屬す。 西脇村 同上

梅林村 檀原村梅林村の内 七隈村

仙道村	石原村	原田村	踏鞴村	吉武村	神松寺村	殘島村	堤村	上長尾村	岳山村	下福重村	曲田村	拾六町村	飯盛村	小田部村	龜原村	犬馬場村
同上○古は臨山村の内、新町、今内野村の内になる。	曲淵村の内	同上	同上		片江村の内	のこっ			たけの	福重村の内	石丸村の内				七隈村の内	
小笠木村	内野村	山田村	西村	石釜村	西油山村	檜原村	東油山村	下長尾村	鳥飼村	羽根戸村	下山門村	福王丸村	本名村	飯藏村	藤崎村	柏原村
		同上				ひはら				はねど	ど	拾六町の内	飯盛村の内		龜原村の内	
	本城村	曲淵村	中山村	上石釜村	荒江村	片江村	免村	隈村	別府村	姪濱村	福重村	石丸村	野方村	原村	庄村	田島村
	内野村の内		西村の内	石釜村の内				下長尾村の内	鳥飼村の内		古は光行寺村といふ					

戸井村 小笠木村の内 栗尾村 同上 椎原村

小爪村 椎原村の内 北田村 同上

荒谷村 椎原村に屬す。新田村也。 板屋村

岸高村 板屋村の内 南谷村 同上 有田村

以上九拾村

内 四十七本村 四十二枝村 此内一新田村

○紅葉八幡宮

此御社、始は橋本村に在。鎮座の時代詳ならず。前國主光之君、橋本村にて生れ給ふ故に、産神なればとて、寛文六年、橋本村より今の地に移され、本社、拜殿、神厨等新に造立有て、社僧、祝人侍り、月毎の祭禮怠らず。祭る所の神三座、中殿則八幡大神にして、左右は神功皇后、寶滿明神也。九月十一日は、恒例の大祭にて、神樂、流鏑馬、猿樂等興行有。始橋本村にては、九月九日、祭禮を行はれしが、此地に遷し奉りしより、重陽は諸人の暇なき日成る故、改て十一日となる。神領百石、國君より寄附し給ふ。

四邊の松原をも附せらる。宮司の寺を妙雲山松壽院西光寺といふ。眞言宗也。是は忠之君、慶安三年、橋本の社邊に立給ひしを、寛文六年に此地に移さる。

又貞享二年、光之君神前に石の鳥居を新に立給ふ。

鳥居の額は梶井宮慈胤親王の御筆也。末社二字、印綸大明神、松河原大明神。

○紅葉松原

少貳系圖には、百道原と稱す。八幡愚童抄には、紅葉原とす。

八幡愚童記に、後宇多院文永十一年、蒙古國より日本を攻し時、蒙古の兵と日本人と、紅葉原にて戦し事を記す。又太宰少貳系圖に、少貳豊前守景資は、少貳資能が嫡男也。弘安年中、蒙古の大將を百道原において討殺せりと云り。篤信案ずるに、百道原は紅葉原共云り。紅葉原にて蒙古人と戦ひし事は、八幡愚童記に云ることく、文永十一年の事成を、少貳系圖に弘安年中と書しはあやまりにや。弘安四年、蒙古の軍兵攻來りしが、鷹島にて大風にあひ、船破れ糧つきて有しを、日本兵少貳三郎衛左門景資を大將として、鷹島に寄て戦ひ、二萬人を生捕、那珂川の

邊にて首をはねしよし。八幡愚童記に記せり。三郎
左衛門後に豊前守と稱せし成べし。魔島は玄界島といへ
るなるべし。又肥前

國唐津の東に、魔島といふ所あり。
詳なる事は、古戦場記にしるす。昔は荒戸の西より百道原

の末、早良川の遠干潟の際迄、平沙邈々として廣く、
松林なくして不毛の地成しかば、長政公松を植て松
原とすべしとて、元和四年正月廿五日、家臣管和泉、
宮崎織部、小堀久右衛門に命じて、其事を司らしめ、
福岡、博多、姪濱の町人に仰て、每家一軒より、高さ
四五尺許なる小松、各一本宛植させられける。此松
年を逐て漸長じければ、十年の後は廣き松林と成て、
幾萬株と云事をしらす。今は喬木多くして、古へより、
名を得て久しき生いきの松原にもまさり、千早振神代に
植し、箱崎の千代の松原にひとし。又唐人町の北、今
の土屋敷に成れる所、又其西地形と云所、金龍寺の
邊迄も、皆此時植し松原なりしが、唐人町の北は、
寛永廿年の比より諸士の宅となり、其西の松原は、
慶安の比、足輕の屋敷と成て地形と名付。今は彼兩

所には松原なし。又元祿元年より、紅葉松原の松を伐て諸士の宅とし、逐年宅多くなる。此松原の北の海邊に小高さ土堤有。古へ異賊襲來しやうらいの防の爲に築し所也。今は石垣見えす。地の下には、猶所々残りりと云。近き比も、此邊の地をほりて、石垣の石を取し者多し。其石に、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向杯と國の名を刻み付たり。是は古へ此土堤を營みし時、公家武家の命に従ひて、九州の人々集り築し故に、其國の名を記せしならん。此石垣の事は猶所々に記し侍ぬ。凡海邊には、何國にも、か様に高く土堤を築し所は稀也。此所は異賊を防ん爲、古へより築し故、岸高くのへかたに築しよし、八幡愚童記に見えたり。生の松原の海邊、志摩郡今津の西の海邊にも、高さ土堤有。又此松原の内、大道の北側に、曇華庵とて、梵刹有ほんせつ、禪宗黃檗派わうはくはの僧天祐和尙、元祿十一年創立す。天祐は當國の産也。隠元、即非、木庵、三禪師に隨侍せり。

○鳥飼村

此村の産神の事は、福岡の部に委く記し侍る。神功皇后御歸朝の時、御饌を奉りし鳥飼氏なりし人の子孫、天正の比迄猶此村に在。鳥飼宮内少輔といふ。其子を三郎と號す。其宅の址村中に在。天正十四年の比にや、御笠郡岩屋の城より夜討を懸しかば、父子共に討死して其嗣なし、鳥飼氏なる人は、民間に猶殘れり。

○草香江

八雲御抄藻鹽草に、筑前に在とす。俗説に、鳥飼村の東の入江也といふ。一説に、荒戸山の下、東南の潮入し所といふ。昔は此山の南入海成しとかや。此二説、證書等はなけれども、云傳ふるを以爰に記す。萬葉集第八卷草香山の歌に、難波を過て打なびく草香山とよめり。又舊事記に云、河内國草香邑青雲白肩の津と云り。草香山草香邑は河内に在。白肩は今の枚方なる由聞ゆれば、草香邑は枚方の邊成べし。仙覺が説に、草香江攝津に在といへり。當國の草香

江、同名異所なるにや。

大伴卿旅人

萬葉四、續後十九

草香江の入江にあさる蘆田鶴の

あなたづくし友なしにして

前右大臣忠

續古十八

草香江の入江に田鶴のたづきなく

友なきねをやひとり鳴らん

法皇御製

新後

草香江の入江の田鶴も諸聲に

千代に八千代と空に鳴なり

○千賀浦

藻鹽草大名寄に、筑前に在とす。俗説に、福岡城の西、鳥飼村の東南の間を千賀浦と云。此所入海成しを、長政公城を築き、要害の爲に水塘とし給ひしより後は、海水入らず。或曰、志賀の島を昔は近の島と云し由、古記に見えたれば、志賀の島を千賀の浦と云べきかと云り。八雲抄には、千賀の浦肥前に在と

す。三代實錄に、肥前松浦郡にちかの値嘉郷ちかの値嘉島あるよし云り。其邊の浦をも千賀の浦と云にや。決定しがたし。

後拾

道信朝臣

千賀の浦に波よせかくる心地して

ひるまなくても暮しつる哉

新六

知家

千賀の浦に焼鹽けぶり春はまた

ひとり霞と成にけるかな

新後

師長

甲斐なしやみるめばかりを契りにて

猶袖ぬるゝ千賀の浦波

名寄

家隆

唐土も千賀の浦廻の夜の夢

おもはぬ方に遠津舟人

同

同

曉の千賀の浦風音さえて

友なし千鳥浪に鳴なり

寂

蓮

夫木

都おもふ夢路は暫し友千鳥

聲は枕に千賀のうら風

○庄村天神社

庄村にあり。村翁の云傳には、管丞相左遷の時、先此所に着給ひぬ。其折節、法淨寺と云眞言寺に、管公一宿し玉ふ。此寺は、天神の社の西の方に在しと云り。今はなし。是によりて、後

世菅公の御社を立たりと云。かゝる由有所なる故、此潟にて焼たる鹽を、昔より今に至迄、八月宰府天神の祭禮の時、神厨に捧ぐ。此御社の事、筑前紀行にも記せり。

○岩木判官正氏墓

庄村の西の端に竹林有。其中に石佛有。村民是を岩木判官正氏が墓なりと云て甚恐る。此正氏は奥州の國主の由、兒女の物語に云傳、世にもてはやし侍る事なれ共、慥ならざる事なれば、信するにたらず。

○室見川

早良川の事也。昔小田部村の邊に、室見大明神の社有し故、小田部村より下の川の名とせり。室見の神社今はなし。

○御手水川

早良川の少西、愛宕山のふもとなる小川を云也。是鷲尾權現へ上る道にあれば、爰にて盥洗せし故に、名付るならん。

○鷲尾權現並愛宕權現

姪濱浦山の上に在。姪濱に屬せり。此山を鷲尾山と云。細川幽齋の道の記には、此山を可也山成様に記せり。傳聞の誤りなり。可也山は志摩郡に在り。鷲尾權現古來より、此所に鎮座し給ふ。里人の説に、此御神は彦山權現と同神也。初は彦山權現も此所に祠り、是より彦山に移し奉ると云。此神を彦山に移せる事、慥ならず。彦山權現は、熊野と同神也。

今此鷲尾權現は、愛宕の後に在小祠也。霜月十五日祭有。寛永十年、國主忠之君、國中に愛宕の社なき事を憂へ給ひて、山城國愛宕權現を、爰に勸請して祭り給ふ。家臣花房次左衛門、木附太左衛門を營作

の總司として經營せしめ、翌年に至て成就せり。凡
愛宕權現といへるは、瓊々杵尊也。麗氣記に見えたり。
光仁天皇天應年中に、慶俊法師といふ者、丹波國愛
宕山に勝軍地藏を合せ祭りて、愛宕權現の本地と稱
す。地藏にもと勝軍の號なしといへども、我國武を尊
ぶによつて、後世の浮屠附託して、本地は勝軍地藏
也。是をたふとせば、必軍に勝利を得るよし云ならば
しける故に、武家殊に是を信することに成ぬ。社僧
の寺を圓滿寺と云。開基の僧祐尊頼暹と號す。眞言宗
也。寺産の月俸、忠之君より寄附せらる。また鷲尾社
の別當坊は、鷲尾山の南の側竹かたはらの山に有。東林寺と號
す。天台宗の山伏住す。愛宕權現を勸請有しより以
來、皆人愛宕山とのみ稱す。元の名鷲尾山とは稱せ
ず。鷲尾權現も又たふとふべき神也。此山上にのぼ
れば、海陸山川のながめ廣くして勝れたる佳景也。
大國に郊たる故に遊觀する人多し。元祿十四年、社
の正面なる南の方に新道を作、石階を疊、ふもとに

石の鳥居を立。又其後遊人の爲に、其下の大道のほとりに、茶肆酒肆を多く立ならべたり。

○岩窟辯才天

鷲尾山の北の麓なる海邊に岩窟有。蓋天工の成せる所にして、人力の開く所には非ず。其入七尺五寸計、横五尺餘、高五尺餘、口の廣さ中間は小に低く俯して入。奥の間高さ六尺許に、内に石厨有り。辯才天の石像を安置す。八月十日祭有。來り拜する人多し。常にも詣で來る者絶ず。その東に又別に小洞有。西の口より入、折轉りて北の口にいづ。其折轉する所低く狭し。纔に側身を容るに堪たり。洞中一間半許有。俗に是を針の耳と云。是皆姪濱の境内なり。

○姪濱

昔柏の濱と云しとかや。八幡記に、神功皇后三韓を退治し給ひて御歸の時、十二月四日、此所に着給ひ、柏の御衣を干給ひけるによりて、柏の濱と號すと云。何の頃より姪濱と云來しにや。今は丸隈山と中隈山

の間の濱を柏濱と云。是神功皇后新羅を平げて歸給ふ時、此所より上らせ給と云。村より爰に道筋有。凡姪濱は福岡博多の外、國中第一の廣邑にて、町廣く人家多し。北條家鎌倉の執權の時は、筑前に探題職を置、鷺尾山則其居城成しかば、此邊は則國の府の邑にて繁榮せしとかや。此所北に山五有。東を浦山と云。是鷺尾山と云。宗祇の筑紫紀行にも、此浦山の景色を譽めたり。浦山の西に山有。上に城址有。興雲寺山と云。是澁川探題の城也と云。後は斯波左京大夫住せり。上に毘沙門堂有。其西なるを丸隈山と云。又道場山と云。其西なるを中隈山と云。丸隈山と中隈山との間の濱、古より土手有。石垣地中に埋まれり。是蒙古を防ぎし石垣也。其西に小戸山有。中隈山に並て海邊也。中隈と小戸の間をおはまと云。小戸の西を妙現崎と云。則妙現の社有。此地平なる岩也。百合若大臣の馬の足形と土民の稱するくぼりたる所多し。妙現の西の濱をさすの濱と云。生の松原

に續けり。此二の濱共に蒙古を防し石壘今に残れり。町の北を廻れる川を長柄川と云。源なし。姪濱の町より南に隈山有。五島山有。姪濱の内に凡寺十七區あり。その内眞言二、天台一、禪宗十、淨土宗一、眞宗三有。神社五區、叢祠十八宇有。

○探題墓

姪濱村の東の入口の北に在小山を探題山と云。此所に墓所有。村民は探題澁川堯顯たかあきの墓所と云。石塔には鎮西將軍日頭大居士と有。昔此所に光蓮山寂照坊と云寺有。其境内に葬りしといへり。又東の田の中に小なる森有。小林と云。此所にも墓所有。是澁川探題の家臣の墓なるが、澁川氏は足利家の執權斯波義將の一類なりといへり。

○小戸

姪濱の西北に在山を小戸と云。中隈山の西也。此所に小社有。民俗は地藏と云。瘡おこりを煩ふ人など、木にて劍矛つるぎほこを作りて是を捧れば、其病癒るとて、祈願する

者多し。其前に異なる老松有。或人曰、日本紀神代卷に、所謂小戸橋の櫛原あはぎとあるは、此地なりと。前に川瀬有。海に近ければ、若くは此所なるべきか。

○興德寺 禪宗濟下

姪濱に在。海晏山と號す。創立の時代詳ならず。大應國師、南浦明和尚唐土より歸朝の時、此寺に来て三年住居す。其時此所の尼、大應の繪像を書せ贊を乞ふ。大應贊を書て與ふ。其掛軸かひもの今に此寺に在。大應國師は其後御笠郡崇福寺に住持せり。興德寺初は市中に近かりしが、天和二年、光明寺と云廢寺有しをこぼちて、其跡に移せり。光明寺の開山一菴は、大應の弟子也。光明寺に木像有しを、今も興德寺に安置す。昔興德寺に子院八區あり。白毫寺、東光寺、檀林寺、三樂院は猶残りて、姪濱市中所々に在。其餘四區は皆廢絶して今はなし。四區の廢寺、圓滿寺、清芳軒、圓通寺、東照寺。

○能古島 能古浦名所也。或は能解浦と書り。今殘島と書。

朝野群載には那珂郡とし、藻鹽草には志摩郡とす。
共に違へり。此島は早良郡の正北に在。那珂郡、志
摩郡には隔たりぬれば、早良郡に屬すべし。故に今
は早良郡とす。福岡より海上二里有。島のめぐり二
里二町十三間有。東西十五町、南北三十町、高さ一
町廿四間、満山芒を生ず。村人は是を刈販かりかきて家産とす。
是を買者は屋のふきかやとし、薪とす。村中に白髭
大明神の社有。是住吉明神也。村翁の説に、神功皇
后異國より御歸朝の時、此島に住吉の神靈を残し留
て、異國降伏を祈給ふ。よつて残の島と云といへり。
古は此島に牛の牧有し由、延喜式二十八卷に見えた
り。又此島より申酉の方に、雜司島有。小き岩山也。
洞穴有。申酉より辰巳に通れり。其上に壹尺餘なる櫛くわ
柏など生ぜり。又此島より辰巳一町半許にぬれきぬ
と云瀨有。俗に龜瀨と云。

凡此島は唐泊にむかへり。故にから泊能古の浦と讀
めり。古歌には所を隔たれ共、近き所を一首の内につ

らねよみし例多し。

萬葉十五

から泊り能古の浦波たゝぬ日は

あれ共いへにこひぬ日はなし

作者不詳

同十五

風吹ば沖津白波かしこみて

能古の泊にあまた夜ぞぬる

光俊

新六

今もかものこの浦しほたかゝらし

とまる舟人おきに出な夢

中務

夫木

潮風はあらくもそなるから泊り

能古の浦舟こき出な夢

○也良崎

残島の北なる出崎也。今はあやまりて荒崎と云。

萬十六

おきつとり鴨と云舟の歸りこば

やらの崎もりはやくつげこそ

同

おきつとり鴨といふ舟はやらの崎

たえてこぎくときかれこぬかは

萬葉云。右筑前國志賀泉郎歌十首の内也。或曰。筑前國守山上憶良臣作此歌一と。今其内也良崎をよめる二首をこゝにのす。

○生いきの松原

山門村の境内也。箱崎の千代松原には及ばずといへ共、林中廣く、白砂清潔にして風景勝れ、他邦にはまたたぐひもなき佳景也。東西十二町餘、南北四五町有。世に云ならはし侍るは、神功皇后三韓を伐んとて赴給ふ時、松の枝を逆さかさまに此地にさして、若事故なく異國を平げ歸らせ給ふべくは、此松の枝いきなん由を祈給ひしに、其松いきたりし故に、生の松と名付たりと云。又此松原の内には、壹岐直眞根子の社有。もし此故に、いきの松原と云るにや。一説に、いにしへ皇后いさよとて、さし給ひし松有て、其枝逆さまに在し故、是を逆松と名付しと云傳ふ。唐士にもかゝる例有。宋朝の寇準こうじゆんと云し人、貶せられし時、竹の枝を地にさしはさみて、再びかへらん

ことを試しが、生活せし事、言行録に見えたり。宗祇法師が筑紫紀行に曰、いきよとてさし給ひけん松は、はや枯て、其根を人守りに懸しなど語るも、昔戀しき催し也。社檀の右の方に、大成る松の、然も姿常ならず神さびたる有。是ぞ末遠く生の松とも云ふべかりけると見るに、我が齡の程はたのむかげなきも心ぼそく、又はかなし事を、

明日しらぬ老のすさびのかたみをや

よを経て生の松にとゞめん

宗祇筑紫に下しは、文明二年の事也。然ば、か様に松の枯しは、夫より猶久敷事にぞ侍るべき。宗祇が生の松と云べかりけると云し松も、今は見えず。昔の逆松の有し所のしるし迎、其所に松を植て、垣結廻せり。此松原の北の海邊は、小高くして長垂山ながたりにつき、高さ石疊有て土中に埋もれり。是古へより異賊の防の爲に築し所、殊に弘安に蒙古を防し石疊也。松原の東の端に十郎川迎小川有。如何成故に名付しに

やしれず。或曰、十六町村の前より流來る故に、よ
みなまりて十郎川と云といへり。

橘 倚 平

拾遺六

昔みし生の松原ことゝはゞ

忘れぬ人も有りとこたへよ

藤原俊生母

同十八

けふ迄は生の松原いきたれど

我身のうさになげきてぞふる

藤原爲正

後拾

祈つゝ千代をかけたる藤波に

生の松こそおもひやらるれ

右三月許に、筑後守にて下り侍りけるに、

選子内親王より扇を給ける御歌の返事によ

めるとなむ。

後拾遺

たびくの千代をはるかに君やみん

末の松より生の松原

右源頼清朝臣、陸奥の任はてゝ、又肥後守

に成て下り侍りけるに、出立の所に誰共な
くて、さしおかせける歌となむ。

源 重 之

後拾遺

都へと生の松原いきかへり

君が千とせにあはんとすらん

藤 原 親 隆

金七

戀しなで心つくしに今迄も

たのむればこそ生の松原

永 縁

詞六

立別れはるかに生の松なれば

戀しかるべき千代のかげ哉

實 方

千載七

昔みし心ばかりをしるべにて

おもひぞおくる生の松原

枇杷皇太后宮

新古九

涼しさは生の松原増る共

そふる扇の風な忘れそ

右一首 太宰帥隆家下りけるに、扇を給ふ
とてよませ給ふ。

新勅八

立別れ遙に生のまつほどは

千とせを過る心地せんかも

待賢門院堀川

續後十一

思ひ出る心づくしのはるけさに

生の松こそかひなかりけれ

太宰大貳高遠

續古九

君か代のはるかにみゆる旅なれば

祈てぞ行生の松原

辨乳母

續後拾遺

おしからぬ命なれ共諸ともに

いかまほしきは生の松原

大僧正道順

新續古今十八

うき事は色もかはらぬ同じ世に

あはれいつ迄生の松原

俊頼

同

行末に生の松原なかりせば

何に命をかけてまたまし

右一首、權中納言基綱、太宰權帥に成て下りけるを、送にまかりて、河尻にてかはらけ取て詠ると云り。

周防内侍

同

都にも久しく生の松原の

あらばあふせを待もしてまし

右大納言經信大貳に成て、筑紫に罷りけるに、遣しけるとなむ。

中務

家集

老ぬとも猶行先の願はるゝ

千年迄にも生の松原

顯中

堀川後百首

戀しなで生の松原いきたりと

つげだにやらぬ道のはるけさ

常陸

同

枝毎に幾その千代を契るらん

その神代より生の松原

顯

昭

六百番

尋てもあはずばうさや増りけん

心づくしの生の松原

俊

成

家集

同じ世に生の松とは聞ながら

心づくしの中ぞかなしき

慈

鎮

さりともと頼む心はふかみどり

けふ行末は生の松原

○生いきの社

生の松原の半分より少東の方、道より南一町半許に在。いきのあたひまねこ壹岐直真根子の社也。熊野權現ましまも相殿に座す。

宗祇法師が筑紫紀行にも、此御社熊野にておはしますと記せり。此社初は逆松の近所に在。筑紫紀行にも、逆松の延寶八年に、今の所に移せり。拜邊に有様に記せり。殿の傍に御馬取、御鞍石など云石有。神功皇后美國

征伐の時、御扈とくの神なる故、此名も有由云り。眞根子も異國征伐の御扈とくつかふまつりし成べし。應神天皇九年夏四月、武内宿禰を筑紫に遣して、以て百姓を監察せしむ。時に武内宿禰の弟、甘美内宿禰うまみうち兄を讒殺ざんさつし、自天下の權を取むと思ひ、天皇に讒言していはく、武内宿禰常に天下を望む情有。今筑紫に在て密に謀り、筑紫を隨へ、三韓を招ておのれに隨はしめ、遂に天下をたもたんと云と聞ぬと申しかば、天皇是を聞し召、使を遣して武内宿禰を殺さしむ。時に武内宿禰この由を聞、吾二心なく忠を以君に事ふ。今禍によつて、罪なくして身を失ひてんこそ心うき事なれと宣ふ。爰に壹岐直眞根子と云人有。姓氏錄に曰、壹岐直は天兒屋根命、九世孫雷命、九世孫雷大臣の後也。其人となり、能武内宿禰の形に似たり。獨武内宿禰の罪なくして、空く死なん事をおしみて、則武内宿禰に語て曰、今大臣忠を以て君につかへて、黒心きたなきころなき事、天下共に是をしれり、願ねがはくは密に爰を避て、朝廷みかどにまうで、みづから罪なきよしを申給ひ

て、赦し給はずば、其後死給はん事遅からじ。時人常つたかに僕が形大臣に似たりと云故に、今我大臣に代て、死を以大臣の丹心を明めんと云て則劔に伏して自ら死す時に武内宿禰獨大に悲しみ。密に筑紫を避て、舟より南海を巡り、紀水門に泊り、わづかに朝廷にまうで至る事を得て、罪なき由を辯す。天皇則武内宿禰と甘美内宿禰うましうちとを推問し給ふ。爰において二人かく執して争ひ、是非決しがたし。天皇勅して神祇に申て、湯を探らしめ給ふ。是を以、武内宿禰と甘美内宿禰と共に、磯城川しきの邊ほとりに出で、探湯くがたちをす。武内宿禰勝ぬ。湯也請の起則横刀たちを執て、甘美内宿禰を打たふして、遂に殺さんとす。天皇勅して宥し玉ひ。よつて紀伊直等の祖に賜ふ。此事日本紀に見えたり。則真根子を此所に祭ると云り。此人武内宿禰に忠付て身を殺し、大切の忠臣をたすけしこと、誠にとふとぶべし。爰に熊野權現も相殿にましますば、人のうやまふべき社なり。されど今はしるしばかりにて、

いとかりそめなる小社也。此社と逆松との間に、秀吉公文祿元年朝鮮征伐の爲、肥前國名護屋にいたり給ふ時、休ませ賜ひし茶店の址有。此神異國退治に陪從有し故、その吉例を思ひ出て御祈願有しと云。

○太閤道

生の松原より山門村どの北を過、姪濱の南を經、七隈、田島の北を通る道有。秀吉公肥前國名護屋へ往來し給ふ時、此道を御通り有と云。此故に今に至て太閤道と稱す。

○山門村

昔は石丸村、十六町村、光行村、此村、先國主の御名と其訓同じき故に、是を今は福重と云。山門村すべて一村なりしを、長政公入國の後、

四村に分たる。此村は下山門と云。今上山門と云村なし。昔は十六町村を上山門と云しにや。日本紀神功皇后紀に見えたる土蜘蛛田油津媛が住し所、則此山門なりと村人は云へども、山門の縣とあれば、是筑後國山門郡の事なるべし。筑後山門より肥前玉島

へ行給ふよし、日本紀に見えたり。今も筑後より肥前の南部を経て、北の方玉島へ越す道あり。

○七隈村原

七隈の東西に高き原有。東最廣し。西もまた長き事十町許有。古き塚穴多し。窟有り。村は兩原の間、谷間に在り。

○小田邊村

村より北の方小高き所に古塚有。松浦殿塚と云。松の木十本許立り。又此塚の南の方に墓有。松一本しるしに立り。是を筑紫殿塚と云。猶山伏墓など云墓も有り。松浦、筑紫、其姓は云傳へ侍れ共、いか成人にや有けん。其名詳ならず。

○野方村

野方村より西の方の山間を越て、志摩郡青木村へ越す道を、廣たうげと云。兩山の間を通る坂なし。道よし。其間一里に近し。野方の南に廣き野有。東西四五町、南北七八町有。其内南の方大半は羽根戸村に

屬せり。野の内に、田畠も林木もなし。野の南の端、羽根戸村の境内に石窟多し。内廣し。此村の西の高き山を叶ヶ嶽と云。山上に地藏堂有。怡土郡上原村に屬せり。

○野芥塚穴

野芥村に石窟廿五所有。國俗は鬼塚と云。穴の入口は狭く、奥は廣し。皆南に向へり。左右及向の正面三方皆大石をたゝむ。上は大石をならべ、天井の如し。かやうの塚穴國中所々に多し。あげてかぞふべからず。此郡の内にも所々に多し。窟の内皆同じ。此國のみにあらず。諸國に多し。村里に近き所は、後代其石を取用んとて、破りたる所多し。民俗は昔ひさか雹降し時、人の隠れし所と云。或は人を葬しつかあな墳なりと云。皆ひがごと也。上古の時、未だ家居なくして、穴に住し時の栖すまなる成べし。周易にも、上古には穴に居て野に處る、後世の聖人、是に易ふるに宮室を以すと云り。本邦の古へも、亦斯の如くなるべし。

○飯盛社

飯盛山の下に在。此山飯を盛たるがごとく、まどかに高き故に其名とせり。飯盛村も山下に在。又御笠郡に飯盛山有。宗像郡にも飯盛が峯有。此國のみならず、飯盛と號する山、諸國にも多し。諸神記しよしんを考ふるに、筑前國飯盛三社權現は、中殿伊弉册尊、左方は寶滿大神、右方は八幡大神なりと有。然ば伊弉册尊を飯盛權現と稱せり。飯盛、吉武、四箇村、金武、田村、羽根戸、野方凡七村の惣社也。此社は山の麓の高き岡の上に在。岡に上りて長路有。其おく右の方に御社有。南に向へり。岡の上の境地廣し。昔は大社にて神領も多く、祠官も數多侍りしとかや。今に神職の家に古き文書多く残りて、昔の盛なりし事を推はかり侍る。又古昔は年中の祭禮度々有しと云。月毎の朔日に必祭を執行ひ、五節供にも祭有。正月十日に武射有。二月初午の祭有。六月晦日夏越なごしの祓はらひ有。九月九日に大祭有て、神輿御幸有。今猶昔の名

殘とて、馬場末に御輿みこしやすめ休の石有。十二月初卯にも祭有。今多くは古法を失ひしかども、正日三日に神饌みりを供へ初む。十四日には餅を供ふ。同十五日には、去年よりそなへ置き粥の乾潤かんじゆんと徴かぎの出るを見て、方角をさして、其年穀の豊凶を試み知る事有。他國にもかゝる例有。鎌倉佐賀岡の守山明神の爲に、里民毎年霜月十五日、酒をかもし置、翌年正月十五日、明神に供ふ。其酒の味の善惡によりて、歳の豊凶をはかり知る。故に世計はかりの明神共云。是又此社の祭に類せり。九月九日には恒例の祭有り。流鏑馬有。里人打つどひ神饌を備へ、祭事を執行ふ。社の南に文珠堂有。神宮寺有。天台宗也。此村の南の方より西の山を越て、怡土郡高祖村の南なる枝村、くぬぎと云所に行道有。日向嶺ひなたと云。是早良郡より怡土郡に行大道也。昔は今の道よりはるかに南の方を廻り、怡土郡末永村に出しと云。今は古道はふさがり、早良より越る坂口は、昔も今も同前也。

○四箇村

村民の説に、凡田十二町を一名とす。此村に四名あり。故に四箇村と名付く。有久名^{十二町}新原名^{十二町}榊名^{十二町}薦田名^{十二町}是也。一説には、産靈四社有故に四箇村と云。飯盛權現、老松天神、警固大明神、鴈川天神是也と云。

○金武村

福岡より三里許有。是肥前三瀬^{みつせ}越に行く道也。是より山を越て一里半行ば、怡土郡飯場村有。飯場より又山を越て三瀬へ行く。飯場より三瀬へ一里廿二町有。金武の境内に立神山と云高山有。此山に岩多し。白石有。蠣殻多くつけり。此所のみに限らず、夜須郡古所山にも蠣殻の付たる大岩有。又他國にも有。金武より怡土郡河原村へ越る道有。山を越行く。龍嶺と云。

○重留村

昌法山正覺寺と云寺跡有。今は田と成ぬ。其廣さ一町許有。法華寺なりしと云。小田部氏の寺にて、其

墓所猶殘れり。此寺院の趾に鐘を埋めて有しに、長政公の家臣吉田壹岐、此郡司たりし時、掘出しける。能鐘なればとて、福岡の城に置れけるが、其後聖福寺に賜り、今に在。

○入部村

昔は一村なりしが、近世東西兩村に別る。西入部村に白塔、黒塔と云所有。白塔に淵有。是早良川の内尤大なる淵也。